Nagano Prefectural Museum of History

長野県立歴史館たより

2020年 秋号 vol.104

特集

秋季企画展

稲作とクニの誕生 ―信州と北部九州―

秋季企画展

稲作とクニの誕生 ～信州と北部九州～

稲作農業の開花

令和２年度県立歴史館の統一テーマは、“食”です。実りの秋、秋季企画展は稲作と弥生文化について取り上げてみます。およそ3000年前、大陸から日本列島に水稲栽培の技術が伝わりました。九州島に稲作が伝来して500年を経て、信州にも“稲”の情報が伝わったと考えられます。

やがて渡来系の弥生人が信州にも入植し、稲作農業が開花しました。稲作には、水稲栽培に主体をおくもの、畑作に力を入れるものなど、いくつかの型があります。信州での稲作文化は、千曲川流域と天竜川流域で、その型に違いがあったようです。そのことは水田の痕跡はもちろん、労働用具の違いに現れ、農業社会の在り方そのものを大きく左右する結果にもなりました。

弥生時代中期の中ごろ、千曲川流域の低湿地帯でも稲の栽培が始まりました。栗林式土器の登場とともに水田開発は進み、やがて灌漑施設を完備した水田がつくられるようになりました。水田の本格的な経営は集落間の連携を強め、集中的な食料生産のために、人々の移住、集住が起こりました。長野市松代町（上信越道長野IC付近）に所在する松原遺跡は、移住により形成された県内最大規模の集落跡です。石器を中心とする労働用具などは、東日本でも屈指の出土量を数えます。集排水用の溝と畦畔による水田の区画は、生産力を飛躍的に高めました。水田造営には木製農具が有効でしたが、材料となる木材の伐採や加工を量産化するには、まだまだ鉄器の流通が不十分でした。

そこで活躍したのが、４万年以上の技術的伝統のある石器でした。

信州ブランド“伐採用石斧”

硬い木を伐採・加工する石斧は、特別な集落で集中してつくられました。石斧の製作遺跡は、長野市若穂に所在する榎田遺跡です。石斧の性能はすこぶる良好であったとみられ、北は新潟・富山・石川県に、南は群馬・埼玉・神奈川県、静岡県へも運ばれていました。直線距離にして200kmにも及びます。まさに2000年ほど前にあった「信州ブランド」といってよいでしょう。

榎田遺跡で製作された石斧は、実は長野市の松原遺跡や浅川扇状地遺跡群中俣遺跡を通じて、流通したようです。集落間は距離にして10km圏内にあり、食料生産を通じて連携を強めた農業共同体が、物流を担う中心的組織として経済的にも成長していたようです。

鉄器の流通

石斧の広域的な流通網が整備されると、不足していた鉄斧も、この交易ルートを通じて信州各地にもたらされるようになりました。県内の道具の鉄器化は、急速に進んだと考えられます。この時期、畑作を中心にしながら稲作農業を進めていた伊那谷では、多量の石製農具を使用していました。畑作は木製農具に適さず、樹木の大量伐採や加工の必要性も乏しかったと思われます。段丘上の耕土は石製農具で足りたため、そのことが逆に鉄器化の波を緩やかなものにしたと考えられます。

新たな社会

石斧の流通を担った共同体組織は、鉄の流通により、新たな経済的秩序に再編成されます。

鉄を生産するところ、それを流通させるところ、そして受け取るところです。信州ブランドで

培った交易力は、弥生後期社会の信州に鉄の流通拠点としての位置を与えました。鉄とともに動く、様々な文物を入手し、経済的に豊かな力強い村落共同体を作り上げたと考えられます。ただし石器の生産と金属の生産は、まったく次元の違う技術水準です。だれもが金属を作りだすことはできません。鉄をめぐる新たな物流経済は、鉄を握る社会に主導される宿命にあり、その意味で経済的な弱さをもちます。いっぽう、農具を独自に製作する自立的な農業社会は、自給自足的側面も強く、経済的に安定し、体力のある村落共同体をつくり上げていきました。

大移動と計画的村落

弥生時代後期の後半、箱清水式土器の時代になると、長野市篠ノ井遺跡群に代表される大規模な計画的集落がつくられます。この遺跡は径200mほどの範囲を囲む深い環溝があり、溝の内側に独立した集落がつくられています。環溝の外側には墓域が広がり、別の集落が離れた場所に設営されます。環溝内の中心部には空間があり、竪穴式の建物と物見櫓を思わせる建物などがあります。祭り、居住、備蓄、対戦等の施設空間を完備した、まさに“城”のような集落です。しかしながら、墓地には特定個人を思わせるようなモニュメントはありません。同じ規模の墓をつくり、副葬される品物の有無、種類の違いにより区別されています。鉄剣とガラス玉をもつ例、釧（腕輪）だけをもつ例などです。こうした墓の一部に、朝鮮半島などの外国産鉄製武器を副葬する墓が登場してきます。上田市上田原遺跡の鉄矛、木島平村根塚遺跡の渦巻鉄剣です。

いっぽう、伊那谷や諏訪地域では、この時期に集落間の連携が強まり、人々の移動、集住が起こります。県南部にも大規模な農業集落が登場してきます。飯田市丹保遺跡は天竜川左岸に設営された大規模な集落ですが、環溝の登場はなく、階層分解は未発達です。畑作に主体を置く農業社会の、緩やかな文化発展の姿がそこにはあります。いくつか墓の集まった墓域は存在しますが、墓の規模に違いはなく、副葬品はほとんど確認できません。

遺跡は掘らないとわかりません。篠ノ井遺跡群の環溝内に住む集団の一族、あるいは特定の個人が埋葬された墓が、まだ発見されていないだけなのかもしれません。環溝集落の終焉期、千曲川対岸の尾根頂には北平低墳丘墓が築造されます。まさに特定の個人墓であり、古墳時代の幕開けを予兆させるモニュメントの登場にあたります。

＊予定しておりました国宝金印の実物展示はとりやめとなりました。

榎田遺跡 伐採用石斧の未成品（当館蔵）

松原遺跡 伐採用石斧の完成品（当館蔵）

弥生時代後期の鉄器、篠ノ井遺跡群（当館蔵）

伊那谷の弥生石器、寺所遺跡（飯田市教育委員会蔵）

考古資料を読む

暮らしを支える古代の竈（かまど）

― 小諸市中原遺跡発掘例 ―

昭和の半ばごろまで茅葺屋根だった父の実家には、鉄製で直径30㎝を超える大型の羽釜の鍋を２つ並べて設置した竈がありました。これらの鍋は、ご飯用と他の料理用に使い分けていた記憶があります。

こういった竈は、古墳時代の５世紀代から出現します。小諸市中原遺跡（1992～1993年の調査）で見つかった６世紀後半の竪穴建物跡のひとつからは、造りつけられた竈が使われた当時の姿をほぼ残すように検出され、残存状況の良さから竈の構造がよくわかります。

竪穴建物跡竈検出状況

白いラインで縦に掘った状況

この残存状況の良い竈の構造を詳しく調査しました。骨組みとして左右の袖と言われる部分の先端に面取りをした石を立て、その上にブリッジ状に天井石と呼ばれる石を乗せていました。天井石は、直方体に加工した石を使っていました。この石の骨組みに浅間火山由来の火山灰が変質したと考えられる粘土などを肉付けして竈に仕上げていました。また、設置された甕（現在の鍋）の底を支える支脚と呼ばれる細長く六角形に面取りされた石と、その支脚を設置した痕跡の凹みも見つかりました。竈には長胴甕（左）と小型甕（右）が横並びに設置されていました。長胴甕の内部には、内黒の暗文坏、左側の小型甕の内部には内黒坏が、蓋をするように置かれていて内部は空洞でした。

このように２つの甕が横に並んで掛けられる竈は「東日本型」と言われます。「西日本型」では１つ掛けとなり、竈の起源と考えられる朝鮮半島の同じ構造と考えられています（註1）。

竈の導入とともに注目されるのが、炊飯方法の変化です。甑（註2）の存在から、蒸すという方法が盛んになっていったと考えられています。さらに、１つ掛けの竈では短時間で蒸される品種が調理され、調理後おかず用の鍋に掛け替え、また２つ掛けでは、長く蒸さないと調理できない品種を調理したため、蒸し用とおかず用に分ける必要があったとの指摘があります。米品種の粘り気の違いが、竈の構造の違いにまで変化をもたらしたことは、土器のお焦げの状況、米のDNA・プラントオパールの分析からも明らかになってきています。米の種類・調理方法、火処である炉や竈の構造の研究から当時の米食の実態がより浮かび上がってきていて、竈の造り方ひとつをとってみても、当時の社会の様相や“食”に関わる調理方法の違いがうかがわれます。　　（近藤尚義）

（註１）杉井　健　1993年「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻１号　p47
（註２）米を蒸すための蒸し器

（参考文献）
臼田武正　藤原直人　山岡一英　上沼由彦 1999年『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18　柴宮遺跡群・中原遺跡群』
小林正史・外山政子　2016年「東西日本間の竈構造の地域差を生み出した背景」『石川考古学研究会会誌』第59号

文献史料を読む

関ヶ原合戦と保科正光

保科正光書状（松澤家文書　当館蔵）

天下分け目の合戦、というと思い起こされるのが関ヶ原合戦です。今回は高遠ゆかりの保科正光（ほしなまさみつ）が関ヶ原合戦の情報をどのようにとらえていたかわかる史料を紹介します。保科氏はもとは高井郡保科（現在の長野市若穂）を名字の地とした武士で、戦国時代は武田家臣として活躍します。その後徳川氏の家臣となりました。1590（天正18）年の家康の関東移封とともに、保科氏は高遠から下総国多胡（たご）（千葉県）１万石大名として移りました。正光はこのとき正式に家督を継ぎました。

1600（慶長5）年７月、関ヶ原合戦の前哨戦ともいえる徳川家康の会津の上杉討伐出兵。しかし石田三成らが大坂で挙兵するとの報が伝えられると小山（おやま）（栃木県）から反転し西へ向かいます。正光は東海道の要所となる浜松城に配置され、石田方の江戸攻撃に備える防壁となります。

正光は、在所の多胡や江戸の家臣に美濃国（岐阜県）での東西両軍の戦闘の状況を逐一報告しています。

今回、当館で購入した正光の書状には９月15日の関ヶ原合戦について次のように記されています。

> 去る一五日、美濃国のうち「山中（やまなか）」というところで行われた合戦では、石田治部少輔・大谷刑部少輔・長束正家・島津義弘・小西行長をはじめとして敵軍が悉くうちとられたとのこと、森（＊西軍の毛利氏）のことは、詫び言があるということです。天下はいったん決着し、めでたいとはこのことです。いよいよ東国筋が落ち着くだろう、と安心します（下略）。

この史料の日付は９月19日ですから、合戦から４日後のこと。文中には「関ヶ原」という地名は出てこず、「山中」村の合戦で石田軍が敗退した、と記されています。山中は西軍の武将大谷吉継（おおたによしつぐ）が陣を置いた場所です。

主戦場は当初関ヶ原でしたが、その後「山中」周辺で激戦となり、西軍小早川秀秋（こばやかわひであき）の内応によって混戦に終止符が打たれました。この史料は、この「山中」での合戦により天下は決着したと述べているので、正光の分析が正確であったといえます。書状の宛先は国元の松澤・丸山・吉川という家老たちです。戦況によっては、上杉景勝（うえすぎかげかつ）や佐竹義宣（さたけよしのぶ）が江戸へ南下する可能性もあったことから、東軍の勝利により、関東は安定するだろうと伝えたのです。

正光は戦後、希望した高遠への復帰が認められ、翌年２万5000石の加増をもって移封されました。

（村石正行）

保科正光画像
（建福寺蔵　当館複製）

歴史資料を読む（夏季企画展史料紹介）

下戸倉村酒屋小五郎酒造願

坂井銘醸（株）蔵

恐れながら願書をもって申し上げ候事

一　古より酒屋にて御座候に付き願い奉り候、酒作り申す様に仰せ付けられ下し置かれ候はば有難く存じ奉り候、以上

元禄十六年未ノ八月

下戸倉村酒屋　小五郎
同村　酒屋　三太郎
同村　名主　九兵衛
同村　名主　茂兵衛
同村　組頭　甚兵衛
同村　組頭　加右衛門

御代官様

この史料は、江戸時代の酒造りの申請書です。1703（元禄16）年、下戸倉村（千曲市）の酒屋小五郎と三太郎が、村役人（名主、組頭）連名で代官に提出しました。

下戸倉村はそれまで坂木藩領でしたが、前年に幕府領に編成されたので、改めて酒屋（酒蔵）２軒の酒造許可を求めたのです。小五郎は坂井家（現坂井銘醸株式会社）５代当主です。

本文冒頭に「古（いにしえ）より酒屋にて御座候」とありますが、坂井家には江戸時代初期、北国街道整備とともに下戸倉で酒造りを始めたと伝わっています。現在でも江戸時代に建てられた主屋（写真）と蔵が残ります。昭和後期までこの地で酒造りを営み、現在は飲食店・土産物店・資料館としてその姿を伝えています。

坂井銘醸（株）の主屋（令和元年　個人撮影）

ところで、江戸時代、信濃国内には200以上の酒蔵がありましたが、なぜこれほど多くの酒蔵があったのでしょうか。

需要面から考えてみましょう。江戸時代には街道が整備され、参勤交代の大名行列、商人や輸送業者（中馬等）が行き交いました。信濃には中山道、北国街道のほか諸街道が発達します。後期には信仰や物見遊山の旅人が往来し、善光寺を目指す善光寺道が賑わいました。下戸倉をはじめ、各宿場での需要があったことでしょう。

もう一つ、供給面から考えてみましょう。江戸時代は米を基準とした農業社会、税制社会（石高制）でした。土地の評価は、面積と米の生産性を基にした「石（こく）」という単位で表され、課税されました。税は石高で請求され、納税も米あるいはそれを換算したお金でおこなわれました。

収納は村ごとで、米は地域の有力者である村役人の下に集められました。金納だった幕府領などでは、米を金に換算する必要がありました。こうして、収納や換金に携わる人の下には多くの米が集まります。酒蔵では、この米、とくに余剰米を使って酒造りをしたのです。

（畔上不二男）

冬季展のお知らせ

洋画家・書家・コレクター　中村不折 ― 伊那谷から世界へ

県立歴史館では、平成29年度より冬季の企画展として、長野県ゆかりの近代の人物に焦点を当てた展覧会を開催しています。これまで、飯田生まれの技術官僚で「博物館の父」とも称される田中芳男、及び安曇野市在住の写真家で高山蝶の研究家としても有名な田淵行男を、独自の視点から紹介しました。今年度は、伊那市ゆかりの洋画家・中村不折（1866～1943）を取り上げます。

中村不折（本名鉾太郎）は、幕末の江戸に生まれ、両親の郷里である現在の伊那市で育ちました。明治17年からは代用教員をしながら日本画と書を学び、やがて洋画家を志すようになります。1888（明治21）年上京、画塾「不同舎」に入り、明治洋画の先駆者小山正太郎・浅井忠の指導を受けることができました。

やがて不折の努力は実を結び、明治美術会の若手として頭角を現し、明治34年には念願のフランス留学を果たし、歴史画の巨匠ジャン=ポール・ローランスらに就いて古典的な人体デッサンを学びました。帰国後は、中国や日本の古典をもとに独自の解釈を加えた油彩画によって、洋画壇に重きをなしました。

《裸体習作》
（油彩 滞欧作 台東区立書道博物館蔵）

一方、1894（明治27）年日本新聞社長・陸羯南と正岡子規の知遇を得たのを契機に、新聞『小日本』の専属となり、以後『日本』『東京朝日新聞』に発表を続け、新聞に掲載する絵画「駒絵」の先駆者となりました。

『小日本』明治27年3月7日（日本新聞博物館蔵）

また、幼い頃から書（文字）に対する並々ならぬ関心を示し、早くから洋画と並行して書に親しみ、収集活動も開始しています。そして、後には六朝風と称される独特の書風を確立し、大きな反響を巻き起こしました。さらに後年は書道資料の蒐集家としても一家を成し、晩年の1936（昭和11）年には「財団法人書道博物館」を創設、その膨大なコレクションは台東区立書道博物館がその運営と研究を引き継ぎ、現在に至っています。

《隷書李白五言律詩・戯贈鄭溧陽》
（紙本墨書　台東区立書道博物館蔵）

本展では、明治中期から昭和戦前期にかけて多分野にわたり表現活動を展開した不折の足跡を、厳選した作品・資料によってたどります。加えて、不折コレクションの中から書道史上の至宝の数々を、北信では初めて紹介いたします。信州に育ち、やがて世界を見据えた表現者・蒐集家となった不折の業績をたどることで、未来の文化創造のための契機となれば幸いです。

（林　誠）

＊会期中、作品・史資料の展示替えをおこないます。

会期●2021（令和3）年1月9日㈯～2月21日㈰
開館時間●午前9時～午後4時
休館日●1/12㈫、18㈪、25㈪、2/1㈪、8㈪、12㈮、15㈪
観覧料●企画展のみ300円（大学生150円）
＊高校生以下無料。講座聴講は常設展観覧料が必要

INFORMATION
インフォメーション

■2020年 10月～12月の行事予定

9月
休館日
7･14
28･29

企画展

秋季企画展
「稲作とクニの誕生」
ー信州と北部九州ー

9/15㈫～11/29㈰

■シンポジウム
集落の連携と「クニ」の誕生を考える
11/22㈰ 午後1時30分～3時
コーディネーター：
石川日出志氏
（明治大学文学部教授）

頭骨のない人骨と甕棺
（吉野ヶ里遺跡、佐賀県提供）

連弧文「日有喜（ひゆうき）」銘鏡
（立岩遺跡、重要文化財、
飯塚市歴史資料館蔵）

＊予定しておりました国宝金印の実物展示はとりやめとなりました。

講座・イベント

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、展示・講座・イベント等につきましては、状況により変更あるいは中止とさせていただくことがございます。

10月
休館日
5･12
19･26

信州学講座in大桑村
10/24㈯ 午後1時30分～
大桑村歴史民俗資料館
講師：白沢 勝彦（当館考古資料課）
テーマ：「信州の城と石垣」

考古学講座 第3回
10/31㈯ 午後1時30分～
「稲作と社会の変化
～共同体の発達を考える～」
講師：町田 勝則（当館考古資料課長）

11月
休館日
2･ 4
9･16
24･30

いい育児の日 親子イベント
11/15㈰

信州学講座in箕輪町
11/21㈯ 午後1時30分～
箕輪町郷土博物館
講師：小野 和英（当館文献史料課長）
畔上 不二男（当館総合情報課）
テーマ：「雛人形の歴史」
「地酒王国 信州」

12月
休館日
7･14
21･
28～31

屋外展示「歴史のこみち」

表紙写真
吉武高木遺跡（よしたけたかぎ）３号木棺墓出土品
（文化庁蔵、福岡市博物館写真提供）

本出土品は、弥生時代中期に福岡平野に築造された「最古の王墓」と呼ばれる木棺墓からの一品。朝鮮半島製の多紐細文鏡（たちゅうさいもんきょう）に銅矛、銅剣、銅戈、そしてヒスイ製勾玉がある。まさに三つの宝物が神器をイメージさせる。重要文化財。

千曲市と連携協定を結びました

6月23日、地元千曲市と、文化・教育の振興や職員の相互派遣などで連携するための協定を結びました。

今後は連携して、企画展や学習会などの開催や、地域の歴史や文化を活かした取り組みなどをおこなっていきます。

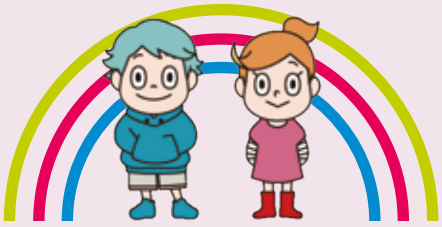
新ホームページキャラクター お名前大募集中

好評につき 9/13まで延長!!

こども歴史館のページを一緒に探検するキャラクターのお名前を募集しています！

探検が楽しくなりそうな、みんなと仲良くなれそうな、素敵な名前を考えてください。

応募はこども歴史館からお願いします。たくさんの応募をお待ちしています。



長野県立歴史館たより 秋号 vol.104
2020（令和２）年８月４日発行
編集･発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000（代） FAX 026-274-3996
E-mail：rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ：https://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社